



<東海金>掛川掌瑛



六大課

明澄透派の扱う「命・卜・相」は、次のような伝統的な五術に限られます。



三式

「太乙神数」「奇門遁甲」「六壬神課」は昔から「三式」と呼ばれ、そのうち「太乙神数」を「天式」、「奇門遁甲」を「地式」、「六壬神課」を「人式」と呼びます。

「天式」とは、「天時」を得るための方式という意味であり、「太乙神数」を上手に使うことができれば「天時」に恵まれます。つまり、いつもラッキーチャンスがあり、手を伸ばすだけで何でも欲しいものを手に入れることができます。欲しいものとはなにかと言えば「財・子・寿・禄」であり、これは中国人に限らずほとんど人類に共通の価値観であり、現代の日本と言えども例外とまでは言えないでしょう。

「地式」とは、「地利」を得るための方式という意味であり、「奇門遁甲」を上手に使うことができれば「地利」に恵まれます。つまり、いつも他人よりも有利な条件を持っており、他人と同じ程度の努力をするだけで何でも欲しいものを手に入れることができます。

「人式」とは、「人和」を得るための方式という意味であり、「六壬神課」を上手に使うことができれば「人和」に恵まれます。つまり、いつも他人に勝つことができ、他人のものを奪ったり、自分のものを他人から守ることができ、何でも欲しいものを手に入れることができます。他人に勝つというと、力づくのことはばかり考えるかも知れませんが、最善の方法は「以柔制剛」つまり日本式に言えば「柔よく剛を制す」ということであり、下手に出たり買収や懐柔策によって相手を絡め取るほうが、力づくよりもずっと代償が少ないものです。武力が伴う争いでも実は「力づく」だけでは勝てないもので、日本の戦国時代を終結させた豊臣秀吉なども戦いの際には徹底した裏工作を行っています。ただし秀吉の出世物語『太閤記』の記述の多く、つまり貧農の出身で橋の上で野

武士に拾われたり、草履取りや馬番から認められてチャンスを掴んだなどのエピソードは明の太祖朱元璋の伝記の丸写し、というのが張明澄先生の見解です。

太乙神数

「太乙神数」は「測局」つまり天下国家の動静を占う「卜」の法として知られていますが、現代の世界情勢に当てはめるのはなかなか難しく、むしろ「命理」と「風水」にその真価を見ることができます。

例えば、ある宗教団体の二代目教祖の「太乙命理」を見たところ、「財帛宮」に「太歳」が入っており、これは、自分に入るべき利得が詐欺などで奪われてしまうことを表しています。この宗教団体には先代からの老練な事務長がついており、財務管理は万全のはずだったのですが、後になってこの事務長が教団の財務に大きな損害を与えていたことが発覚しました。

また「太乙命理」の命盤には十六宮があり、生まれた場所から見て、吉星の入っている宮の方位に向かって移転するようになれば、その吉星の象意に見合った開運のチャンスに恵まれます。つまり「天式」である「太乙命理」では「造命法」として「方位」が使えるのです。しかも「十六宮」ですから、方位も「十六方位」という特殊な割り方をしています。

「太乙風水」もまた「天式」としての特長を持っています。「巒頭」の見方は「奇門風水」と何も変わりありませんが、「奇門風水」のように「巒頭」に「格局」があれば「理気」でこれを覆すことがないというものではありません。つまり「天時」とはチャンスのことであり、ちっぽけな「地利」など捨ててしまえば、より大きなチャンスを掴むことが可能になるものです。

「太乙風水」の理気盤は「門向」と「屋向」（「碑向」）から出され「干支」つまり時間には関係がありません。ただし一世つまり30年ごとの行運を見ることができます。このような性質から「太乙風水」は、住宅などよりはもっと大きな高層ビルなどを見るのに適したものと言えます。また「陰宅」を見る場合も、納骨堂や共同墓地などを見るのに「六壬風水」のような問題がなく、埋葬されている人全員の子孫たちに均等に作用が及びます。

「太乙風水」の「理気」では「貴賤・吉凶・寿夭・富貧・成敗」の「五訣」を見ることができます。この方法はこれまで公開されてきませんでした。いずれは公開して「太乙神数」の真価を知らしめるべきと考えております。

奇門遁甲

現在、「奇門遁甲」は非常に良く知られた「五術」ですが、1960年代後半に張耀文先生が『奇門遁甲天書評註』『奇門遁甲地書評註』（台湾集文書局）を公開されたのがブームの始まりであり、それまで「奇門遁甲」は名称が知られるだけで、具体的な作盤法や使用法は誰も知りませんでした。今日、世界中で流布されている数多くの「奇門遁甲」は、すべて両書がベースになっているものと考えて間違いありません。

「奇門遁甲」は「方位」つまり「卜」の中の「選卜」が有名です。それに間違いはありませんが、方位作用というものは、一般に考えられているようには簡単に発生しません。

また方位の使い方として『奇門遁甲天書評註』で公開された「立向盤」と呼ばれる、自分が移動する方法を重視する人が多いようです。しかし、少なくとも台湾に残った「奇門遁甲」の門派は、ほぼすべてが「地書派」であり、当然「坐山盤」を使います。

むしろ「天書派」は少数派ですが、「天書派」には「坐山」の方位がないのかと言えば、もちろん、そんなことはありません。「奇門遁甲」はもともと戦場で陣地を築くための方術であり、「坐山」がなければ何の役にも立ちません。つまり「天書派」は「立向」の使い方を重視するものの、同じ盤で「坐山」も判断します。同様に「地書派」は「坐山」を重視するものの、同じ盤で「立向」も判断します。

「明澄透派」は「天書」と「地書」を両方兼ね備えていますから、「立向」を見るときは「天書」の盤、「坐山」を見るときは「地書」の盤という使い分けができ、さらに「行軍三奇」という「彼我」の「勝負」を見る方法を使うことができます。本来「彼我の関係」を見るのは「人式」の「六壬」だけであり、「地式」の「奇門遁甲」でできることは「地利的条件」を良くするだけで、「勝てる」かどうかは分かりません。そこに「行軍三奇」の意義があり「立向盤」と「坐山盤」を両用する必然があるのです。

重要なことは「奇門遁甲」は「地式」であり、「地理風水」に関わることや「土」や「水」などを動かすことにはかなり敏感ですが、人間が移動することについてはあまり敏感ではありません。つまり、通常行われているような「引越し」や「佑気取り」のような使い方では効果がありません。「入学試験」や「出張販売」などではもっと効果が期待できますが、使う時間を自由に選べないなどの制約があり、実行が難しいものです。移動にかかる時間が「時盤」でも最低2時間以上必要ということも知られていません。また、個人に対して作用するのは「時盤」だけということも、ほとんど理解されていません。

「奇門命理」について、当時の日本では出生時刻を知る人が少なく、「子平」や「紫薇」などは不便だから出生時刻抜きで使えるものをという要望に応え、最初の「奇門命理」は日盤で判断する方法が公開されました。もちろんこれは方便であり、本来の「奇門命理」は時盤で行うものです。また「奇門遁甲」の作用は「格局」がほとんどすべてであり、「命理」においてもその判断は、盤の「主格」が何であるかに絞られます。例えば、皇后陛下(美智子様)の「奇門命盤」は、「青龍返首」が「主格」になっており「身分の向上」や「目上の恩恵」という象意によく合っています。さらに副格が「戦格」でありこれも合致します。このように「奇門命理」は「格局」で人生の重大事や「地利的条件」を端的に表現するものです。

「奇門風水」は、特に「外家巒頭」(地理)の見方に優れており、まさに「地式」の真骨頂を示すものと言うべきです。逆に、「風水」の「巒頭」から「奇門遁甲」が出来たというのが張耀文先生の見解です。現に、『明澄透派・風水大法』は、「星平会海」の理論で書かれた家伝書ですが、その『巒頭篇』は「奇門風水」の「格局」によって説明されています。つまり「風水」の「巒頭」(外家)とは「地理」そのものであり、人間にとっての「地利」を決定する要因と言えます。

それに較べますと「奇門風水」の「理気」はやや頼りなく、「巒頭」に「格局」ができてしまえば、もう「理気」ではそれを覆すことはできません。これは「陽宅遁甲」つまり「家相盤」だけでなく、「坐山盤」で土を動かす場合、つまり「奇門遁甲造作法」を実行する際にも確実に制約となるものです。

「奇門遁甲」は「面掌」つまり「人相」や「手相」などにも応用されますが、こちらは「格局」を構成できないので本来の「奇門遁甲」のレベルには及びませんが「玉掌流」という精度の高い方法が公開されています。また「字画数」の「姓名学」にも「奇門遁甲」が応用されており、「十干」の分類により、6画・16画は「己儀」で「人気運」(松田聖子など)、9画・19画は「壬儀」で「勝負運」(青木功、鈴木大地など)のようによく当たるように見えるものもありますが、やはり「格局」を構成するものではないので「奇門遁甲姓名学」とは言えません。

本当の「奇門遁甲姓名学」は「音声」だけで判断するものであり、呼び名の音声から「天・地・門・神」を取り出して「格局」を構成する、非常に合理的なものであり、現実の人物名や、企業名などに当てはめて、たいへんよく的中するものです。

もうひとつ、「奇門遁甲」が真価を見せるのは「印相」であり、印面の「八方」に「八門」を置き、「干」に変換された「画数」と「河洛理論」に基づいて「八門」の上に「天盤干」を配置し、さらに「子平理論」に基づく「字形」の「干」によって「地盤干」を決定すると「格局」を構成することができ、「奇門遁甲印」が完成します。これに「七政星学」の「十二宮」を加えたのが「星平会海」の「宮印」というものです。

六壬神課

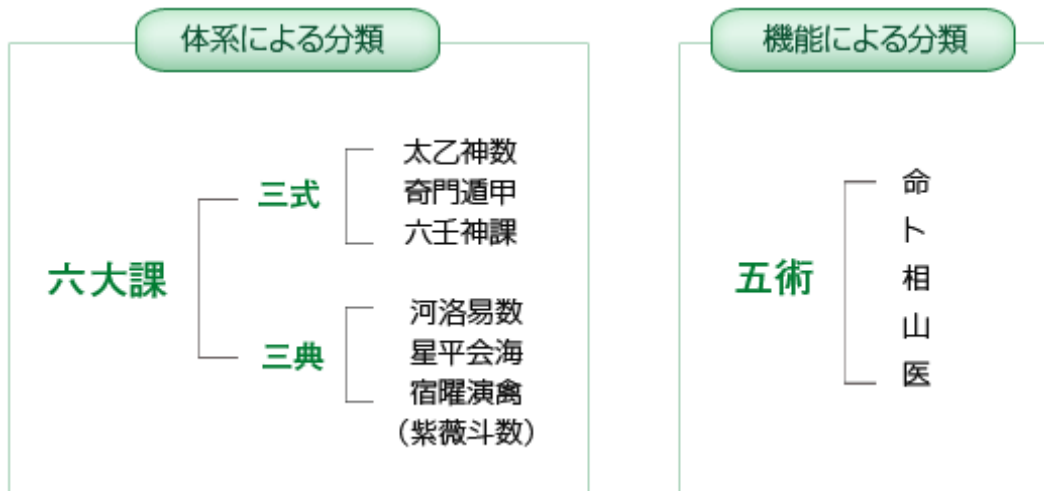
「六壬」と言えば、客の来た「時間」で課式を立てる「占ト」が最も有名ですが、「六壬命理」もまた捨てがたい魅力を持った「命理」といえます。例えば干上神は「身宮」に当たり自分自身が感じる自分のタイプを表します。「命宮」は月将と生時から出され、こちらは世間や他人が感じる自分のタイプを表します。配偶者との関係を「干上神」と「支上神」で見たり、身内との関係は「干上神」と「二課」、世間との関係は「干上神」と「四課」で見ることができます。また「初伝」は「人間形成期」、中伝は「発展期」、「末伝」は退陰後の「余生」という具合に大まかな一生の運命を見ることができます。この辺が「人和」を見るべき「六壬神課」の「命理」としての価値があります。この他に、「命宮」「財帛宮」から「福德宮」「父母宮」までの「十二宮」が加わり、非常に立体的で豊富な象意が得られ、しかもその掌意は非常に的確であり、「命宮」を別にすれば「紫薇」以上によく当たるように感じられます(これには理由があり「紫薇」の章で説明します)

「六壬占ト」については、今更言うまでもありませんが、「干上神」と「支上神」の関係で「人和」つまり「彼我」の関係を的確に判断することができます。そして「三伝」を合わせて結果を判断するのですが、「六壬」の真価はあくまでも「人和」にあり、「彼我の関係」の含まれない「占的」では、無理な使い方をすると「靈感まがい」の「オカルト占い」になってしまうことがあります。「六壬神課」を使うなら、「彼我の関係」を「干上神」と「支上神」に確実に当てはめることが必要条件であり、「六壬占ト」を使って「当たらない」という人は、皆「彼我の関係」を比定しそこなっています。

「六壬風水」は「巒頭」に関しては「奇門風水」と内容的には何ら変わるところはありません。「六壬風水」の価値は「理気」にあり、「奇門風水」にはない「巒頭」を超える力を秘めています。

「六壬陽宅」(家相)の決め手は「職業干」にあり、同じ「屋向」と「門向」の家でもその家の「職業」によって全く異なる「六壬課式」を構成し、例えば、携帯電話ショップのような「通信業」で盛況だったテナントに、客層が近いからといって、ゲームショップのような「娯楽業」が入っても同じように盛況になるとは限りません。「職業干」とは「日干」の代りに使うもので、「通信業」なら「戊」、「娯楽業」なら「己」のように選択します。同じ向きに店舗が並んだ商店街や、テナントビルなどは、ほとんど「地利条件」が同じでありながら、流行る店とそうでない店があります。もちろん経営努力やセンスの違いが大きいのですが、店が変わったら人が変わったようになるのも、よく見かけたり経験することです。

「六壬陰宅」(墓相)の決め手は「仙命」つまり埋葬される人の「生年干支」を日干支の代りに使います。納骨堂や共同墓地では困るかと思うかもしれませんが、「陰宅」の作用は埋葬された人の実子、孫、曾孫までの三代の人々にしか効果がありません。つまり「仙命」と「門向」「碑向」の組み合わせによってできる「六壬陰宅」の「課式」が総合計点でプラスになっていればこの墓は吉相墓であり、共同墓地でも問題ありません。ただし「陰宅」の場合は「外家巒頭」(地理)に加えて「本家巒頭」つまり石碑自体の「巒頭」の良し悪しが大きなウエイトを占めるものであり、「理気」だけでどうにかなることはありません。



三典

「五術」には、先ほどの「三式」つまり「太乙」「奇門」「六壬」の他に「三典」つまり「河洛」「星平」「演禽」があり、これらをあわせて「六大課」ともいいます。通常「紫薇」は「六大課」に含まれませんが、実星を扱う「演禽」を「星平」の一種と考え、代わりに「紫薇」を「三典」に加えることがあります。

「三典」は、「三式」のように、つまり「天式」「地式」「人式」というように関連したものではなく、「星平」と「河洛」「演禽」には役割分担というものではなく、互いに補完する関係でもありません。「星平」と「紫薇」だったら、補完する関係がないこともありませんが、「河洛」と「紫薇」にはそのような関係が見出せません。つまり「三典」というのは、三点で一組というのではなく、ただ「経典」とか「古典」と言えるようなものを三種類集めただけということになります。

そう考えますと、「河洛易数」という体系は、ひたすら「易卦理論」によって出来上がっており、「干支」はむしろ補助的に使われています。また、「星平会海」は「干支理論」と「天文理論」だけでできた体系であり、「易卦理論」の介在する余地はありません。「宿曜演禽」は、ほとんど「天文理論」だけの占術ですから「星平会海」と共通する体系になっています。そこで、「紫薇斗数」を「演禽」の代わりに「三典」に加えた場合はどうでしょう。

「紫薇斗数」という体系は「干支理論」にも「易卦理論」にも依存するところがありません。「十二宮」は「天文理論」から来ているのではないかと思うかもしれませんが、「星平会海」「六壬命理」「西洋占星術」など同じ「十二宮」を使う体系とは異なり、「紫薇斗数」の「十二宮」だけは独特の順序で並べられます。「紫薇」では「干支」は使わなくても「五行局」というものがあり、「五行論」だけは共通のように見えますが、「五行局」には「生剋」の関係がなく、実は「五行論」とは関係のない論理でできています。

「紫薇斗数」が成立したのは、元代から明代にかけて、と考えられますが、その原形はインド=チベット仏教の「如来蔵」にあります。実際「如来蔵」の算出方法は「紫薇」と全く同様ですが、ただ「尊名」など、用語だけが違っています。なかでも「五行局」に相当するものは「五大」とされており、これはインド哲学の概念です。また「十二宮」についても、その独特の配置から「十二縁起」との共通性を見て取ることができます。つまり「紫薇斗数」は「干支」や「易卦」などの「道教理論」による体系ではなく「仏教理論」による体系であると言う事ができます。

以上のような検証の結果、「三典」に「紫薇」を組み入れることは、次のような意義があることが理解できます。

- ①「河洛易数」は「易卦理論」による体系である。
- ②「星平会海」は「干支理論」と「天文理論」による体系であり、「宿曜演禽」もここに分類できる。
- ③「紫薇斗数」は「仏教理論」による体系である。

「道教」では「如来蔵」と同じように、「紫薇」と同じ方法で出された「尊格」を利用した祈祷や儀式を行います。例えば、「紫薇星」は、「如来蔵」では「釈迦如来」、「道教」では「道德天尊」であり、「太陽星」は、「如来蔵」では「大日如来」、「道教」では「原始天尊」などとなります。つまり「紫薇斗数」はもともと「道教」の体系ではないため、「紫薇」の星の名は、「道教」の「尊格」の名称として統一できないのです。

河洛易数

「河洛」というのは「河図洛書」の略で要するに「易卦理論」のこと、「易数」も「易卦理論」の意味ですから、「河洛易数」とは、そのまま「易卦理論による体系」を意味します。

「易」と言えば「卜易」が有名ですが、「河洛易数」の体系には「命・ト・相・医・山」がすべて網羅されています。

また、「易」は時代順に「周易」「漢易」「宋易」に分類することができます。このうち「周易」は『易経』と混同されがちですが、「周易」というのは「周」の時代に書かれた「易」のことで、『易経』というのには、「周易」に「十翼」という後世に書かれた解説のようなものを付け加えたものであり、「周易」と同義語ではありません。

『周易』は中国で最初の書物と考えられておりますが、「占ト」の為に書かれたり、実際に使われた書物であるかどうかは明らかではありません。周時代の甲骨文や金石文には『周易』に関する記述や同じ文章が見られないため、公式には使われなかったのではないかと考えられます。

『周易』に書かれている内容は、当時の漢字の意味や文法で解釈する限り、非常に「記述」的であり、演繹的な論理によって書かれており、道徳や規範よりは、実利を重視していますし、体制や権力に対して批判的な内容も見られます。このような内容は「占ト」の象意として非常に役立つものであり、クライアントに対して的確なアドバイスを与えることができます。

それに較べて「十翼」の内容は非常に「規範」的であり、『易経』とは、「儒教」の倫理や道徳の書と言えます。本文の解釈の仕方も、周時代の漢字の意味や文法を無視し、「儒教」の倫理に都合の良い解釈になっており、経文は「占ト」としての役に立ちません。また、「十翼」は、「周易」の文言を、漢代以降の漢字の意味や文法によって解釈しており、ほとんど意味の通らないものになっています。

「漢」の時代には、『易経』が「占ト」の役に立たないことは分かっており、『易経』の経文は無視され「易卦」だけを利用して爻ごとに「十二支」を配置、「五行の生剋」を利用して「吉凶」を判断する「漢易」（京房易）が開発されます。「漢易」は「卜易」と呼ばれ、中国人の「易卦」を使う占いはすべて「漢易」つまり「京房易」です。日本では「漢易」のことを「断易」とか「五行易」と呼び、「周易」はただ「易」と呼びます。また日本では「吉凶」がはっきりしている「断易」はあまり人気がなく、あいまいで教訓的な「易」のほうが好まれてきました。つまり「断易」で「凶」と出たらもう救いようがなく、「易」のように「行いが正しければ」救いがあるという教訓のほうが重宝がられたのです。また、「断易」と「周易」を同時に見るのは邪道のように言われてきました。

「断易」では占のごとに「用神」を定め、「用神」の爻に付された「十二支」が「五行」の「生剋」の結果、強ければ「吉」、弱ければ「凶」と決定します。「用神」の決め方は、「六親」つまり占断者（依頼者）からみて何に当たるかによって決まるのですが、日本ではここが曖昧にされています。

「明澄透派」の『ト易大法』によりますと、「用神」の決定は原則がはっきりしており、強弱は点数化されて、占的が容易に可能な事柄であれば点数が多少マイナスでも「吉」と見ることがあるし、到底不可能な事柄であれば点数が中程度にプラスでも「凶」と見ます。この方法により、例えば張耀文先生は台湾で高校教師をしていた時期がありましたが、生徒の大学受験の可否を「断易」で占って、外れたことがなかったといえます。つまり生徒の実力をよく知っている上で、「断易」の点数を組み合わせることでよく当たるのです。

また、『ト易大法』では、吉凶の「断」は「ト易」で見て「解」は「経文」つまり「周易」を見る、とあり、「吉凶」がはっきりしている上に「象意」も豊かで「救い」のある「占ト」となっています。

「断易」は、よく「六壬」と比較され、「吉凶」の鋭さでは「断易」、「象意」の豊かさでは「六壬」、などと言われます。しかし、本当の使い分けは「彼我」の関係がはっきりしているものなら「六壬」、そうでないものは「断易」のほうがよりの確な結果を得られます。

宋時代になると、儒者による「理学」とともに「易理論」が発展し、『皇極経世書』『太極図説』などが流行します。そして「六十四卦」を円形に配置した「円図」、方形に配置した「方図」が作られ「風水」の「羅盤」に配置されるようになりました。この「円図」「方図」が配置された『伏羲六十四卦方位図』を見たライブニッツは、それが二進法の原理に基づいて構成されていることに気がつきます。

もともと「易卦」の記号は、黄帝の子孫で夏王朝を建てたイラク＝メソポタミア系の民族が持ち込んだ「数字」であり、「楔形文字」と共通するものです。つまりライブニッツの分析は実に正しく「陰爻--」は「0」、「陽爻—」は「1」を表し、「八卦」のうち「坤卦」はすべて「--」で「0」、「乾卦」はすべて「—」で「7」を表します。当時の数字は、ギリシャ数字でも「ⅠⅡⅢ」と棒を並べただけであり、「易卦」のような抽象的な概念を持った数字は珍しいものです。「八卦」はその形象から、「地・雷・水・澤・山・火・風・天」という「自然現象」を割り当てられ、当初の「数字」から、「象意」を持った「分類記号」に変化し、さらに「八卦」同士の組み合わせによって「六十四卦」となり、もっと複雑な「象意」を持つ高度な「分類記号」に成長します。そしてその「易卦」の順序は、『易経』の無意味な順序ではなく、ライブニッツの喝破したように、「坤」から始まり「乾」に終わる二進法の順序が正しく、『周易』は書き換えなくてはなりません。既に『周易の真実』（張明澄口述・掛川掌瑛編著）では「坤」「復」「師」……「乾」という順序で「周易」全編を解釈しており、台湾の学者たちから賛同を得ております。

「周易」とは、「夏」の民族が持っていた「数字」としての「易卦」と、「殷」や「周」の民族が持っていた「表意文字」としての「漢字」が結びついて「六十四卦」という「分類記号」であらゆる「事象」を表現するものです。かくして、『周易』は中国最初の書物であるとともに、「典型的記号分類」という中国の学問文化の根幹を決定付けることになりました。

「宋易」から生まれた体系には、「測局」で有名な「皇極経世」や、「心易」とも呼ばれる「梅花易数」があります。

「河洛易数」の「命理」は、「皇極経世」による「月卦」を「本卦」とし、日時から「変卦」を出して立卦します。「六親」の強弱から「財子寿禄名」を見ることができ、また「変卦」が分かれば「周易」で「象意」を見ることができま

す。例えば、山口百恵の「命卦」は、「賁」から「噬嗑」に変わる卦であり、「世爻」の「官鬼」が「用神」ですから、夫のことつまり結婚が人生の最重大事となります。また「象意」は「賁」の四爻にあり、「婚媾」のために、誰にでも従順にする、とあります。「賁」は「装飾」の意味があり、「大人しさを装う」というニュアンスがあります。

「河洛方位」もあまり知られていませんが、非常に合理性があり、特に「日盤方位」に関しては他の「選卜」と一線を画します。立卦法は、冬至から陽遁で一から九、夏至から陰遁で九から一を一日に割り当て中宮に置いて「内卦」とし、方位の宮を「外卦」として「易卦」を作ります。「用神」は目的によって決まり、その強弱によって吉凶を判断します。これは作為性が少なく不合理を排除した方法と言えます。「奇門遁甲」で「陰遁」を「一」からはじめる方法がありますが、「河洛方位」を知っていればそうとは言えません。

「河洛印相」は、印面の「紫白」の位置に重点を置くシンプルなものですが、やはり合理性があり、「奇門遁甲印相」の「八門」の使い方と共通性があります。

「河洛姓名」は、音声によって「易卦」を出すもので、これも「奇門遁甲姓名学」と共通性があります。

「河洛面掌」と「河洛風水」は、形象や方位などを「八卦」に変え、「八卦」と「八卦」の組み合わせで立卦するもので、「河洛方劑」などにも共通する「座標系」的な考え方を取っています。

星平会海

昔から「星平会参」という言葉があるように、「子平」と「七政星学」を合わせてより精度の高い判断を可能にしたのが「星平会海」です。

「子平命理」は、既に「命学の王」と呼ばれており、さらに「七政命理」を使う必要があるのか、と思うかもしれませんが、「星平会海」の理論は非常に精密にできており、優先するものの順序がはっきりしています。

「子平」の象意は「用干」と「在位」によって判断され、「強弱」「格局」「体用」「喜忌」さえ取ればどんな命式でもあらゆる象意を知ることができます。ところが、「用干」による象意は演繹的論理というよりも帰納的な結論から導かれたもので、経験的に紛れがない、と言えるのに比べ、「在位」の象意は、やや演繹的な推論という面があり、「用干」ほどには確かなものとは言えません。

その点「七政命理」の方法は、「七政星」の運行を観察して、「七政星」と「七政星」、「七政星」と「十二宮」の角度がどうなれば、どのような現象が起こる、という経験則から帰納的に導いた結論を利用していますから、その精度は、「子平」の「用干」よりは低いが、「在位」よりは高いというレベルにあります。

そこで「星平会海」では、命式中に「用干」がある場合は「用干」で象意を判断し、「用干」が無い場合は、「七政星」の作る角度構成で象意を取り、「七政星」が角度を構成しない場合は、「子平」の「在位」で象意を取るといった重層的な方法が取られます。また「七政星」と「七政星」が何らかの角度を構成する場合は、「七政星」と「十二宮」の場合よりも優先して採用します。

また「星平命理」は、その象意の豊富さを利用した「造流年」というコンテンツを持っています。これは、子供が生まれた金持ちの顧客のために、その子供が生まれてから死ぬまでの一生一代を本のような厚さで事細かく書いた鑑定書を作成するものです。もちろん金持ちが相手ですから、その代金もたいへんなもので、とてもいい加減なことは書けません。

「星平会海」を「占卜」として使う方法は、「占時」で「出世図」のような「星図」を作り、その「星図」に出る「七政星」同士の角度や「七政星」と「十二宮」の構成する角度によって、あらゆる事象を判断します。これは非常に象意が豊かな方法です。

また「選卜」つまり「方位」では、「七政星」の位置から作る方位上の角度の影響範囲内は、その「七政星」の持つ意味と角度により吉凶と象意が生じます。「年」の方位は「土星」、「月」の方位は「木星」、「日」の方位は「火星」と「太陽」、「時」の方位は「金星」と「水星」を使いますが、「七政星」同士の構成する角度も判断に加えます。つまり「金星」の方位を使う場合でも「木星」や「火星」の角度が考慮されます。そのため「七政方位」で

は、「奇門遁甲」などのように個人は時盤だけ、という限定がなく、使い分けは、移動に要する時間や期間などによって決まります。「七政方位」は「子平方位」とよりも、むしろ「奇門遁甲」と組んで使われ、「七政方位」を優先することが知られていますが、それは「奇門遁甲方位」の制約によるもので、逆に「座山」で土を動かすような場合に「七政方位」を考慮する必要はありません。

「星平会海」は「星度派」ともいわれるように、「七政星」という「実星」を使い、天球上で方位や角度を出しているため、「真北」を基準にした方位を使うかのように勘違いしやすいものですが、「五術」で使う方位はすべて「羅盤」の方位であり、天球上から算出した方位角度であっても、必ず「羅盤」の方位で使用しなければなりません。

「西洋占星術」の考え方では、太陽や惑星などの天体は、人間の運命や事象に対して物理的な影響力を持つものと考えられていますが、「七政星学」では、惑星の逆行を認めないなど、天体の物理的な作用に見えるものは、ある種の「時間」による作用、という考え方になっています。つまり「認識」による作用と言い換えることもできます。

「相」の「星平風水」は、「明澄透派」の「風水大法」でも使われているように、その「理気」に特長があります。「子平陽宅」の「理気」は、「奇門遁甲」のように家全体を見るものではなく、部屋や設備ごとにその「立向」を求め、「年干」と「世干」で作った「天地」の組み合わせによって「吉凶」と「象意」を判断します。さらに「七政星」の運行を「皇極経世」の原理により、一日を一年、一月を一世、一年を一運で換算した「星母」というものを「七政方位」のように方位盤に当てはめ、その角度によって、部屋や設備に対する毎年の「運」を見ることができます。

また「陰宅」では、「坐山」と「立向」に分けて、一族の「対内的」な面と「対外的」な面を見ることができます。

「星度派」の「羅盤」は、日本ではもちろん台湾でも入手が難しくなっており、「明澄透派」の「羅盤」には「星度派」の使う「十二支方位」と「星度」の角度を刻み、実践者の用に供するものです。

「子平面掌」の特長は、「手相」の掌線で「用干」の象意を取り、人相の部位で「在位」の象意を取る、という方法で、優先順位を明確にしています。ここに「十二宮」の面相を加えたのが「星平面掌」となります。

「星平会海」の「印相」は、「奇門遁甲」の「八門印」と「子平」の「干印」に、さらに「星平面相」の「十二宮」を加えたもので、あらゆる「印相」の中で最高度の理論と実効性を持つものです。

あらゆる「姓名学」の中でも「子平姓名学」は、「字画・字音・字形・字義」という「姓名」のすべての要素を備えており、ここに「奇門遁甲姓名学」の「音声」と、「紫薇」や「六壬」の要素を加えた「字形姓名学」及び「字形姓名行運法」を加え、これで「星平姓名学」は完成と言って良いでしょう。

「宿曜演禽」の見るべきものには「命理」と「風水」があり、「命理」では太陽がどの「星宿」や「十二宮」に入るかで判断するため、生時を使わなくても良い場合が多く、「生時不明」の人にも使えるという利点があります。「風水」でも「坐向」を「星宿」で見ると、他の「風水」にはない独特の「理気」を持っています。

紫薇斗数

「紫薇斗数」については、「明澄透派」の方法と、それ以外の方法に相違点があり、小さな論争になっていますが、対象になっているのは、「紫薇」か「紫微」か、つまり草冠のつく「薇」か、つかない「微」か、節気の月を取るか、旧暦の月を取るか、という二点くらいしかありません。

「微」か「薇」かの問題は、明代や清代の書籍や目録に「紫薇」も「紫微」もあることが確認されているので、もともと争点がありません。また「紫微」のほうは「北極星」の別名であり、「植物」の名称でもある「紫薇」よりも相応しいという意見もありますが、「紫薇斗数」の星は、ほとんどが「虚星」つまり架空の星であり、「太陽」や「太陰」も天体の運行とは全く無関係であり、「実星」の名称だから正しいとは言えません。

「紫微斗数」の「主星」を、「紫微星」、「北斗七星」、「南斗六星」、「日月」(以上で十六星)その他、に分けたものもありますが、「紫薇斗数」の「主星」(十四星)は「紫薇系」の六星と「天府系」の八星に分かれており、しかも「紫薇系」の星同士は同宮しない、「天府系」の星同士も同宮しない、という規則がありますから、その分類は明確なものです。

この「紫薇系の星」が「如来蔵」では「如来」に当たり、「天府系の星」が「菩薩」に当たります。「紫薇斗数」では、「紫薇系の星」と「天府系の星」が同宮した場合、「紫薇系の星」を優先して取るという原則があり、これは「如来蔵」の取り方と一致します。何故「紫薇系の星」を優先するかは、「紫薇斗数」の側からは説明できないことであり、「如来蔵」が「紫薇斗数」に先んじた体系であることの証拠とも言えます。

「北斗七星」「南斗六星」という分類は、同宮する星も、同宮しない星も、一緒に入っており、グループとしての共通性が無く、「紫薇斗数」の「主星」がすべて「実星」と関係があるというような考え方は、「紫薇斗数」の理論体系から考えると適合しません。ただ、穿った見方をすれば、最初に「如来蔵」を「紫薇斗数」として創作(アレンジ)した人が「北斗七星」や「南斗六星」などに含まれる「実星」の名称を、無理やり「如来」や「菩薩」の名前に当てはめた、という可能性も否定しきれません。実際、「釈迦如来」には「紫微」、「大日如来」には「太陽」、「地藏(月光)菩薩」には「太陰」、と「北斗」でも「南斗」でもない星ではうまく当て嵌めています。

ところが、「北斗七星」には「禄存」という「如来蔵」では使わない星や、「文曲」という「如来蔵」では「孔雀明王」に当たる星も含まれていますが、「文曲」と対を組む「文昌」は「南斗六星」にも含まれません。ここまで整合性のない当て嵌め方をするのは、何ともおかしな話であり、作者は、実星の名前を借りただけで、「北斗七星」「南斗六星」という「分類」に意味を持たせるつもりは無かったと推察することができます。

それでも、「紫微」という実星の名前を、無理やり「釈迦如来」に当て嵌めたのだから、文字としては「紫微」のほうが良い、と言いたい人もいるかもしれません。しかし、実星の「紫微」とは関係ないから、あえて「紫薇」という架空の星の名前に変えたという言い方もでき、しかも記録上どちらも残っているのですから、結局水掛け論にしかありません。

節気の月か、旧暦の月か、については、既に張耀文先生が『紫薇闡秘録評註』(台湾・五術書局・1966年発行)に於いて述べておられます。即ち、『紫微斗数全集』巻之三「起例」第三句に「不依五星要過節」(五星に依らず、節を過ぎるを要す)とあり、その意味は紫薇には「木火土金水」の「五星」は不要で、「節気を過ぎる」つまりどの「節気」の月かだけが必要であるとし、張先生が試したところ、「節気」の月で作盤したものはよく当たり、そうでないものは当たらなかった、ということです。なお、「不依五星要過節」(五星に依らず、節を過ぎるを要す)という文は、「七言」の「歌訣」の一部でもあり、これ以外の読み方はあり得ません。

旧暦の月を採用すると、閏月には、二ヶ月間同じ月になってしまい、この間は、旧暦の日付が同じなら全く同じ命盤ができてしまうという矛盾も生じます。また、実際にやってみれば、明らかに「節気の月」のほうがよく当

てはまります。ただし、比較の対象になるのは「命宮」同士だけであり、他の宮同士を較べても明確な違いは分かりません。その理由は後記します。

「五術」の内容は、「流派」や「門派」によって異なるのは当然のことで、違いがないなら、「流派」などいらなし、「門派」も存在する必要がありません。

「紫薇」か「紫微」か、「節月」か「曆月」か、このような問題は、各々が自分の属する「門派」のテキストにだけ従えば良いことですが、自分の「門派」の理論に矛盾がないのかどうか、常にチェックする心構えは必要です。

「命学の王」は「子平」であり、どうして「紫薇」が必要なのか分からない、とか、「紫薇」は「子平」ほどよく当たらない、という人も多いようですが、「紫薇」と「子平」の違いをよく理解していないと、その使い方も間違えてしまいます。

まず「命宮」について言えば、「紫薇斗数」の「命宮」はその人のタイプをズバリと表すもので、ほとんど紛れがありません。何故なら、「紫薇」の「命宮」とは「如来蔵」そのものであり、その人の「守護仏」が決まるところですから、間違えることはありません。「紫薇」を「推時」に使えるのもそのお陰です。「子平」は、と云うと、「命宮」に当たるものは「用神」ということになりますが、それはあくまでも「人生の重大事」ということであり、その人のタイプまでは分かりません。

ところが、他の「十二宮」となると話が違います。例えば「子平」で「財運」を見る場合、「財干」または「月干」の「喜忌」や「強弱」により、その人の「財運」が社会のなかでどのレベルにあるかが分かります。しかし、「紫薇」の「財帛宮」を見ても、他人との比較や社会的なレベルというところまでは分りません。つまり「紫薇」の「財帛宮」で分ることは、自分にとって「財」に関することが、得意なのか不得意なのか、という自分の中での比較しかできません。

張耀文先生の占例で、ある理髪店に勤める理髪師の「命盤」は、「財帛宮」だけが非常に良く、後はどの宮も良くない宮ばかりという状態でした。ところがこの人の収入は、いつも固定給の20万円しかなく、とうてい「財運」が良いとは言えません。もちろん「子平」の「財運」も良くはありませんでした。このような例に会うと、どうも「紫薇」は「当たらない」などと思いがちなものですが、実は非常によく当たっていたのです。この人は、出世もできないし、妻はヒステリックで子供たちは親不孝、親や兄弟とは疎遠で、血圧は高いし、財産はなし、ところが毎月の固定給の20万円だけは安定して手に入る収入であり、生活はそれなりに安定していました。つまり「財帛宮」だけが良い「命盤」とはそのような意味だったのです。この理髪師の相談内容は独立に関わるものでしたが、もちろん今ある固定給を捨ててはいけません。

「紫微斗数」の弱点は、「五訣」(貴賤、吉凶、寿夭、富貧、成敗)について他人や社会と比較できないということであり、「子平」との併用は欠かせないところです。

「紫薇斗数」の「占ト」は「占時」で「命盤」を作り、「方位」なら「時盤」か「月盤」で判断します。役に立たないものではありませんが、「三式」などを知っていたら、あえて使う気にはならないかも知れません。

「紫薇面掌」も、部位の名称が「紫薇」の用語になるだけで、それほどの特色はありません。

「紫薇風水」は、「門向」「屋向」を測定して、「十二支方位」で「月支」と「時支」、旧暦の日付の代わりに「門向」の角度を使って「陽宅盤」を作るというユニークなものです。問題は角度の測り方で、通常の「羅盤」では、十二支方位ごとの角度を見るのはなかなか難しいものです。

ただし、今般あらたに設計した「明澄透派」の「羅盤」なら、「十二支方位」に「星度」の目盛を刻んでおり、「紫薇風水」も容易に使えるようになります。

「三典」の最後に、「宿曜演禽」を入れるべきか、「紫薇斗数」を入れるべきか、どちらも一長一短あって難しいところですが、「演禽」を使える人は非常に少なく、「紫薇」を使う人は非常に多い、という理由で「紫薇斗数」を採用することはできません。「四庫全書」に含まれないことも「紫薇」の弱みですが、「紫薇」を使う人が、「三典」や「六大課」の一つという認識を持っていないと成り立ちません。

「六大課」の体系は、どれも個別に「五術」を持っているので、一種類でも間に合うようにも見えますが、これまで説明したように、それぞれの体系に優れた点があり、また「三式」のように補完しあう関係になっています。

台湾で「五術」を志す人たちにとって、「六大課」すべてをマスターすることが人生の目標とされてきました。しかし、今日「六大課」をすべてマスターした人は台湾にもほとんどいません。

日本に居ながらにして、「六大課」を学べる私たちは、何とも幸運であり、みすみすチャンスを逃すことはありません。